

聖日礼拝説教要旨【2015年11月29日】

「光はやみの中に」

創世記 第1章 1～5節
ヨハネによる福音書 第1章 1節～5節

説教 本庄侑子伝道師

待降節第一聖日を迎えました。教会の暦では今日から新しい一年が始まります。典礼色は悔い改めを表す紫となりました。世間がクリスマスを前に明るく賑わい始める時、教会の一年が紫で始まるのは何とも暗く不思議な気がします。

しかし、今年のアドヴェントにお読みするヨハネによる福音書も、初めから「やみ」(1章5節)を見ています。冒頭部分は創世記1章を意識して記されたと言われますが、創世記も初めから「やみ」(創世記1章2節)を語っています。

聖書はやみを知っています。私たちが経験する、あらゆる悲しみ、痛み、喪失感、空しさの現実に深く触れるのです。創世記1章は、世界がどのように成立したかという現象を科学的に説明しているのではありません。紀元前6世紀のイスラエルという具体的な人々を背景に持っています。全てが崩壊し、生きる望みも意味も失ってしまった。一時的な気休めや、楽観的に捉えようとする努力では、もう立ち上がることなどできない。そんな時代に記されました。人人は切実に問うていました。世界や私たちの存在の確かさ、その意味はどこにあるのか、と。

「神は『光あれ』と言われた。すると光があった。」(3節)神の言葉から生じた光は昼と夜を分ける、時の光でした。世界は混乱し、足場も崩れ去ったように見えました。しかし神は、世界の根底に流れる時の秩序を知らせ、夕べを朝をもたらししている私を見よ、とお語りになったのです。「神は光を昼と名付け、やみを夜と名付けられた。」(5節)《名付ける》は《支配する》という意味も含みます。やみをも支配している私を見よ。神の主張は続きました。

聖書は、「初めに神が」(創世記1章1節)「初めに言が」(ヨハネによる福音書1章1節)と語り出し、神から自分を捉え、神の言葉から世界を捉えて生きるように悔い改め(方向転換)を迫る神の言葉です。ヨハネによる福音書は、神の言は《イエス・キリスト》だ、とさらに踏み込んで伝えます。

「この言に命があった。」(ヨハネによる福音書1章4節)ヨハネは「命」を「永遠の命」としてよく用います。それは、永久不滅の肉体を意味しているのではありません。神との交わりがある命、神に語りかけられ、神の愛を受け、神を愛し返さずにはいられない命のことです。

「そしてこの命は人の光であった。」(1章4節)主イエスもご自分を「光」と言い表し、世界を覆うやみを見つめておられました。(8章12節、12章46節)主イエスの目に映ったやみ、それは、神なき人生につきまとう暗さ、神から隔たって生きようとする私たちの罪でした。罪は、私たちを神から切り離し、自分から物事を捉えさせ、互いに憎しみ合う世界を造り出させます。主イエスは、私たちが造り出すやみの根源、本当のやみ、罪から救うために来られました。

「光はやみの中に輝いている。」(5節)クリスマスの夜、神の愛がやみの中に輝きました。やみの中でもがく私たちを救わずにはいられない父なる神の愛、この私のためにやみの中に来て下さり、私の代わりにもたえ苦しんで死なれた主イエスの十字架の愛が輝きました。

「やみはこれに勝たなかった」(5節)の「勝つ」を、ある英語の聖書は「grasp(掴む、理解する)」という言葉を用い、新共同訳聖書は「理解しなかった」と訳します。やみの中にある私たちは、光なる主イエスを掴みきれません。主イエスは、私たちが理解し、願い求める《救い》をはるかに凌駕しておられるからです。しかし、私たちが主イエスを理解できず掴みきれなくても、主イエスが私たちを掴んでくださる。主イエスを通して天の父の声が響いてきて、冷たかった心が脈打ち始めます。やみはこれに勝たないのです。

神は、人に命をお与えになった時、「生めよ、ふえよ」(創世記1章28節)と祝福なさいました。全てが崩壊し、何も生み出すことなどできない不毛の時代でした。しかし、それらを打ち破るようにして語られた強烈な神の決意、それが祝福でした。主イエスへの信仰によって与えられる永遠の命、神との交わりがある命は、未来を開かずにはおれない神の強烈な意志を実現する命、新しい出来事を生み出す生命力です。私たちが毎週、礼拝の終りに受ける祝福は、そのような命と力です。

今年もアドヴェント・クランツに光が灯りました。光はやみの中に輝いています。私たちを罪から救い、永遠の命を与え、未来を開かずにはおれない神の決意こそが、ここに輝いているのです。

(記 本庄侑子)